

(平成30年12月29日)

第31回 赤松小三郎研究会のご報告

日時： H30. 12. 18 (火) 18:30～21:00

場所： 東京・文京シビックセンター 4F B会議室

出席者：20名

< 配布資料 >

資料—1 ● 「赤松小三郎の号令詞について」 石川浩氏作成

資料—2 ● 「なぜ松平忠固は嫌われたのか」 東郷えりか氏作成

< 回覧資料 >

「30の名城からよむ日本史」(安藤雄一郎 著・日本経済新聞出版社)

< 内容 >

1. 赤松小三郎の号令詞について・・・石川浩氏

結論：「右へ準え」や「右向け右」は小三郎の翻訳と言われることがあるが、安政4年(1858年)の文献には既に用いられており、彼の翻訳ではない。

根拠となる文献：『幕末期日本におけるオランダ号令の受容とその日本語化問題～土佐藩「徳弘家資料」所収のオランダ号令関係史料の解読と分析～』(坂本保富 信州大学教授)

・安政4年前後に高島・江川・下曾根の御三家においてオランダ語の号令詞を日本語の号令詞に訳しており、小三郎の号令詞と全く同様ではないが「右へカヘレ・右左へ廻レ・右に向け・左に向け・左向イ・廻れ右」等が安政4年頃既に用いられていたことが判る。

2. なぜ松平忠固は嫌われたのか・・・東郷えりか氏

(今回は116枚ものスライドを使用した上記タイトルを中心とする幅広い松平忠固に関する発表であったため、ここでは極力「なぜ松平忠固は嫌われたのか」に絞って報告をする～記録者)

(1) 忠固が嫌われた理由その1：地元上田での評価が割れている

・徳富蘇峰の忠優(忠固)論・・・「老獺・狼戾(欲深く道理に背く)・我執・俗吏にして猾吏・悍吏」

蘇峰は上田へ来たことがあるという。蘇峰の忠優論はその時の地元（特に古老層）の評判の悪さも影響しているものと思われる。

- ・忠固は早くから通商の重要性を知っており、安政四年産物会所を設けるなどして専ら上田縞、絹、紬の輸出販売に注力した結果、天保四、六、七年の上田地方凶作に際し、他領から米穀を買入れて藩民の飢えを救った。
- ・また、二度の老中時代を通じて上田藩の生糸輸出に大きく貢献したが、それは一方で生糸の高騰、機械製糸、力織機の普及等により上田藩の紬織業の衰退につながった。

（2）嫌われた理由その2：幕府＝将軍と譜代の威信を守る保守派

- ・忠固は、開国派ではあったが、一方で従来の将軍と譜代大名による政治システムを固持する保守派（幕府至上主義）であったために、幕政に参加しようとしてきた御三家の水戸藩や親藩の越前福井藩などと衝突したり疎まれた。

（3）嫌われた理由その3：水戸の徳川斉昭と対立

- ・ペリー来航時は水戸斉昭を中心とする攘夷が主流だったが、忠固が二度の老中時代に斉昭を無視するかのよう半ば強引に開国を推し進めた。最初の老中罷免は斉昭の指図であった。逆に忠固が老中再任の際は斉昭が参与を免じられている。

（4）嫌われた理由その4：幕府改革を目論む中根雪江に敵視される

- ・越前福井藩主松平春嶽や中根雪江自身が忠固と対立する徳川斉昭に心酔していた影響と、親藩と国持大名の国政参加（＝幕府改革）を求めたことにより、雪江は忠固の政敵であった。
- ・「昨夢紀事」はその福井藩士、中根雪江の日記をもとに執筆・編纂されたこの時期の忠固の一級史料。しかし皮肉にも忠固にとっては政敵が残した記録。

（5）嫌われた理由その5：自説を曲げず気難しい性格

- ・「唯上田は関東にて可レ然と申見込にて、大に異論相立」（橋本景学全集2、P916）、「伊賀守義兎角我意申張、何事も決著不致」（井伊家史料6-103）、他、政敵が残した記録によると、忖度とは無縁の潔癖でとっつきにくい性格であった。
- ・春嶽や（酒井家と井伊家は数代にわたる縁戚で、忠固の姪の夫である）大老井伊直弼からの買収工作にも応じなかった。

（6）嫌われた理由その6：不透明な背後関係から邪推された

- ・忠固はとにかく開国を優先させたため将軍継嗣問題では南紀派（慶福、後の家茂）、一橋派（慶喜）のどちらでも良かった。将軍の側用人にコネもあり（松

平忠徳、本郷丹後守泰固、等) 将軍家定からは精忠の者として認められていた。一方で出身の酒井家は九条家と長らく縁戚関係にあった。九条家は五摂家の中で家領が最大、九条尚忠はそれまで30年以上にわたって関白の地位にあった鷹司政通に代わり、1856年に関白に就任。

(7) 嫌われた理由その7：邪推され共通の敵とされた

- ・例えば、本来対立していた井伊大老（幕政のトップ）、松平春嶽（本来は幕政に関与しない親藩の雄）、堀田正睦（日米修好通商条約締結時の老中首座で、条約締結直後に違勅の責任を取らされて忠固と一緒に老中を罷免された、開国派ではあったが老中次席忠固に対しては快くは思っていなかった）は、忠固を共通の敵とすることで味方同士になるような、いじめの構図すら感じられる。

(8) 嫌われた理由その8：違勅条約の首謀者とされた

- ・初代外国奉行の岩瀬忠震は忠固の部下として条約締結の交渉事務を行った。彼は開国には賛成だったが幕府単独での調印には懸念を抱いており、越前藩の橋本左内と意気投合してからは条約問題より将軍継嗣問題に熱中した。一橋慶喜を将軍継嗣にするために忠固を味方にしようとして裏工作を仕掛けるが上手くいかず、忠固を煙たい上司として敵意を抱くようになり、忠固が老中罷免になるためならと違勅条約締結に賭けた。
- ・一方、南紀派も、意のままにならない忠固を罷免しようとして盛んに工作をしていた。こうして忠固に関して「諸悪の根源」、「表裏のある」、「隠れアンチ一橋派」という酷評が広まった。

<最後に～記録者の感想>

- ・このように忠固は将軍継嗣問題を背景に己の足を引っ張る勢力に「われ関せず」と開国に向けて孤軍奮闘していた。そんな中で将軍家定や側用人は忠固の罷免を拒み続けていたことは救われる気がする。しかしその事実は史料「公用方秘録」（彦根城博物館蔵）でも長らく伏せられていたとのこと。他にも埋もれている史実が明らかになることを願う。

3. 赤松小三郎研究会の土曜日開催、開催場所、寄付金箱の設置について～ 滝澤進会長より提案

◎提案の主旨：今後、若手を含む多くの皆さまの研究会への参加を促し、会員拡大につなげる

- ・開催日：現在偶数月第三火曜日 → 来年4月以降偶数月の第二土曜日へ変更
- ・経費（会場費）増加については、会費は据え置きとし、会員の皆様からの寄

付金等（寄付金箱の設置）によりまかなう

4. 来年の講演会の講師について～小山平六事務局長より連絡

・岩下哲典氏（東洋大学教授）に決定

演題（予定）「幕末人物史～赤松小三郎と坂本龍馬・中浜万次郎」

・開催は9月実施予定で調整中

以上

記録者：荻原 貴（79期）